
あの娘の味

choco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの娘の味

【Nコード】

N1428C

【作者名】

choco

【あらすじ】

……そうそう、怖い話っていえばねえ、ちょっと時期がずれまして、バレンタインデーの話なんですけれども、私も一度だけ、そんな目に遭ったことがありますてねえ――

もう何年前の話になりますかねえ、中学生の時分なんですがね、後にも先にもその一度だけ、私もいわゆる本命のチョコレートを貰ったことがあるんですよ。いやいや、本当ですって。そんなに驚かなくても。

今でも覚えてますよお、二月十四日、華の金曜日の放課後、天気は快晴！ その日の私は、まあ、ご多分に漏れず、本命どころか義理チョコすら貰えなくてねえ、一人寂しく昇降口に向かったわけですよ。それがまた寒い日でねえ、校舎は古くて隙間風が酷いわ、チョコは貰えないわ、友達連中はみーんな女のとこに行っちゃもうわで、もう中から外から北風がびゅうびゅう吹きすさぶわけですよ。まあそれでもね、まだ最後のチャンスがある！ つつってね、ほんの少しだけ期待を抱きながら下駄箱にぬん！ と対峙したんですよ。このフタを開けた先に『何か』あるだろう、というかもう、あつてくれ！ つていった感じですかね。ともかくそんなわけでね、覚悟を決めてエイヤッ！ とフタを開けたんです。

そしたらねえ、なんと、あったんですよ！ 手紙が。まあ手紙っていつても、よくあるなんかキティちゃんやら何やらの可愛らしーい便箋とかじゃなくてね、ルーズリーフっていうんですか、ああいうノートの切れ端みたいなのでねえ、その手紙の娘は元来暗い娘だったんでしょかねえ、ハサミかなにかでちよっといびつな真四角に切ってあって、それが四つ折りになってるんですよ。

それがもうえらく無機質で。

いやあもうそれを見つけたときはなんて言うんですかこう、冷や水を吸い込んだみたいない心地がしましてねえ。嬉しいのが半分と、あとはなんと言いますかこう、どうにも不気味なのが半分、もうとにかくドキドキしちゃいまして、それ持って急いで校門を出まして、

誰にも見られないようにそれを開いたんですよ。そしたらねえ、なんかこう、右に傾いたような独特な字で、

「今日の四時半に、末広公園に来て下さい。」

とこう、それだけ書いてあったんですよ。――そう、渡し主の名前もなんにもなし。ねえ、変な手紙でしょう――それを読んだのが大体四時位でしたかねえ、半端に時間があつたんですよ。なんだか気味悪いいなあ、なんて思いつつも、やっぱり男の子でさア、そっから真っ直ぐに例の末広公園に向かったんですよ。

それはもう急ぎに急いで公園に向かったんですけどねえ、何せまだ三十分弱時間が余ってるわけですよ。いやもうその三十分が長くて長くて。

公園の真ん中にでっかい時計があつたんですけどね、それを見ては待ち見ては待ちしてたんですよ。

そこは公園なんつっても遊具の一つもないような砂利敷きの広場でねえ、周りには、公団住宅っていうんですか、あの寂れたのが三六〇度ずらーつと並んで、そうでなくても公園の周りには木が鬱蒼として日の光も入らないってのに、そりゃあもう薄暗くて、一体全体どうしてこの娘はこんな場所を選んだんだ、なんて思いながらもね、やっぱりチョコレートは欲しいわけですよ。公園の端っこのベンチに腰掛けてねえ、三十分ひたと待ってたんですよ。

ところが！ そりゃもう待つて待つて待ちくたびれてやっと四時半になったってのに、女の子はおろか、人一人来ないんですよ。私はもう凍ちゃいましてね、あと五分待つて来なかったら帰ろう！ と思ったんです。ひよつとしたら趣味の悪いいたずらなんじゃないか、なんて疑い始めてたこともありましてね。

で、五分経ったんですけどねえ、もやっぱりだれも来ないんです。そしたら丁度良く少し遠くのところでサイレンの音やらやじ馬がなんやかんや騒ぐ声やらが聞こえてきましてねえ、帰るついでにそっち

を冷やかしていくか、と立ち上がったんです。でもねえ、やっぱり諦めきれなかったんでしょね。今私が帰った後にこの女の子が来たら、なんて邪念が頭をよぎりまして、しょうがない、もう十分待つか！　ってまたベンチに座ったんですよ。

我ながら何考えてたんだですかねえ、そのまま一時間半も待ったんですよ。辺りは真っ暗になるわ輪をかけて寒くなるわで、鼻ダラダラの身体ブルブルになってとうとう、もう今度こそ、ほんっとーに今度こそ帰る！　って立ち上がった途端！　来たんですよ、女の子が！

ウチのガッコの制服に真っ黒いコート羽織って、髪なんかばさっ！　と下ろしてるんですが、もう見るからにさらっさらしてて、その奥の目がくりん、と大きくて、ちよつとその目付きが鋭くてねえ、可愛いような怖いような、見覚えのあるようなないような娘がこっちにゆーっくり歩いて来るんですよ。

もう寒いやらなんやら全部吹き飛ばような心地でしたね。もういろんな意味で見とれてしまうような娘でしたよ。そりやもう急いで袖で鼻拭って、なるべく気取って、こんばんは、なんて言ってみました。

でもねえ、その娘一っ言も喋らなかったんですよ。そう、遅れてスママセン、の一言もなしです。すったすったと真っ直ぐにこちらに歩いてきてねえ、ずいっ！　と私に何か箱を突き出したんです。

その箱に目をやると、そりやもうボロボロで、車にでも轢かれたんじゃないか、って位の有様だったんですよ。私は一体これはどうしたもんかと思ってその娘の方に向き直ったんですけど、そしたら！　もうその娘はいなくなってたんですよ。もう何もかも訳が分からなくて、私啞然としてしましましてね、とりあえずその箱を開けてみたんですよ。

そしたら！　中身の――トリュフチョコ、っていうんですか、艶のない丸っこいチョコだったんですけど――それには傷一つついて

ないんですよ！ 紙のカップに一つずつ、きれいに並べてありましてね、私も不思議に思いましたもう一度フタをあてがってみるんですけど、それが閉まらないんです。

何度も試してみるんですけどやっぱり駄目で、とうとう諦めて中のチョコに手をつけたんですよ。一つ口に含んでみたら、何と違いますか、こう、鉄のような味がしましてね、とても食べられた代物じゃなかったんですけど、こう、なんですか、どうしても食べなくちゃいけないような気がしましてね。もう半ば無理やりに口の中に押し込みました。

それで、次の月曜日なんですけどね、もうあのときの娘は誰だったのか気になって気になって、教室に着いたら真っ先に探してみようと思ったんですけど、生憎その日は全校朝会がありましたね。

それで、校庭に並んで校長の話を聞いたわけなんですけれども、その校長が言うには、なんでも金曜日の四時半過ぎにウチのクラスの女の子が自動車との事故で亡くなったって言うんですよ。名前は聞いたことがあったんですけど、どうにも顔が思い出せなくて、というよりもその時の私はそれどころじゃなかったんですね。もう周りをキョロキョロして、金曜の娘はいないか、って朝会の間中探してたんですよ。

まあ結局見つけれないまま教室に戻ってきたんですけどね、したら私の前の席の机に花が活けてあったんですよ。私はその時になってやっと思い出したんですよ。金曜の娘はこの席の娘だ！ ってね。授業を受けている時、丁度黒板の下の子の邪魔になる位置にあの彼女のさらさらした頭があったんですよ

クラスの中でも目立たない娘でしたからねえ、思い出すのに時間がかかるのも無理はなかったと思うんですけども、でも仮にこの席の娘だったとすると、おかしいことがあるんですよ。

だって、先刻の朝会で校長が、亡くなった、って言ってた娘なんですから。花が活けてあったのだってそうでしょう。その娘がその

一時間半後に私のところに現れる筈がないんですよ。私ちよつとどうにも訳が分からなくなりました、——人違いで片付けるには無理がありましたしね——席に着いてからしばらくぼかん、としてたんですけど、一時間目の授業が始まってすぐ位ですか、後ろの方からねえ、女子達の話し声が聞こえてくるんですよ。

「さっきの校長先生の話あったでしょ、あの事故が起きた後、私そこに行ったんだけどね、車は凹んでたし、あの子も酷いことになってたんだけどね、もうほんとにぐちゃぐちゃになってたんだけど、血がね、どこにも、全然着いてなかったの」

今考えてみるとですね、きっとあの娘は急いで私のところに来ようとして、事故に遭ってしまったんでしょうね。

それでチョコも自分もぐちゃぐちゃになってしまつて、でもどうしても私にそれを渡したくて、自分の『ぬけがら』から血を集めて、それでチョコを固めたんじゃないか、って。こんなのはあくまで私の憶測に過ぎませんし、私は幽霊なんてこれっぽっちも信じてないつもりなんですけれども、今でも、あのチョコの味が彼女の血の味だったのかと思うと、少しぞっとするんですよ。

(後書き)

昔チャットで即席でやった小話を思い出したんで書きました。時期がずれてるのはそのせいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1428c/>

あの娘の味

2010年10月11日14時02分発行